

# 黒木あるじと ひがしね百物語

## 第五夜

まなびあ  
テラス

2022年3月31日発行



### ひがしね百物語とは？

山形市在住の怪談作家・黒木あるじ氏をナビゲーターに迎え、「ひがしね百物語」と称し、怪談を切り口に、その地域にまつわる様々な伝承や歴史などの物語を掘り起こしてゆくプロジェクト。毎回少しずつテーマやアプローチを変え、東根を新たに読み解いてゆく。

### ふしぎポストとは？



開催日約一か月前から百物語。当日まで、館内に出現する怪談投稿専用ポスト。館内の図書館入口に設置され、来館者からの不思議な体験談の投稿を受け付ける。投稿された中から黒木氏が厳選し、当日に参加者に紹介する。紹介された方には特製ステッカーを進呈。主な材質は木材、ひょうたん。投函口が狭い。

### ナビゲーター 黒木あるじ



一九七六年青森県生まれ。二〇〇九年、『おまもり』で第7回ビクターワン怪談大賞・佳作を受賞。『ささやき』で第1回『幽』怪談実話コンテストブロンズ賞を受賞し、二〇一〇年に『震(ふるえ)』でデビュー。近著は『小説ノイズ』(noise) (映画ノベライズ) など。山形市在住。

#### 第五夜「山と峠―関山よもやま」

第一部 関山の暮らしとトンネル怪談  
 第二部 御所山信仰  
 第三部 ふしぎポストの投稿の紹介  
 怪異譚蒐集の時間

日時 二〇二二年八月二十一日(土)  
 十七時〜十九時

場所 まなびあテラス市民ギャラリー

朗読：黒木 司会：高橋  
 企画：まなびあテラス  
 市民活動支援センター  
 天野・高橋

## 第一部 関山の暮らしと トンネル怪談

地区の産業や暮らしの  
変遷をたどり、関山峠に  
怪談が生まれた背景を探った。

#### 朗読 「関山峠」

あらすじ：昭和三十五年、子供の頃の黒木。深夜、急な仕事が入った配達員の父のトラックに同乗し、仙台に荷を運んだ帰り道。滝のような大雨の中、関山峠で父は急に車を止め、「どうすつかなあ」と呟いた。見ると、道脇に若い母親と五・六歳の娘が手を繋ぎびしょ濡れで立っている。状況的に普通ではあり得ない。父は逡巡した後、窓を開け「荷台に乗れ」と叫んだ。

母子が荷台に向かうと、車が、ずん、と沈んだ。車を走らせながら父は終始無言だった。峠を過ぎ、町まで来ると雨が止んでいた。父が車を停めたので、急いで荷台を見に行くと、二人の姿は無かった。ずっと停まらず走っていたのに。「どこにいったの」と聞いても父は黙ったまま、悲しげな表情に見えた。ずいぶん後になって関山峠にお化けの噂がある事を知った。女の幽霊で乳飲み子を抱えているとかなんとか。父は噂を知って

たのか、なぜ乗せたのか。七くなる前に聞いておけば良かった。(山形県・六十代男性)

黒木 今回は、この東根市と隣の宮城県とを結ぶ「関山峠」を取り上げる。ここは心霊スポットとして山形県内では昔から超メジャーな場所。しかし、怖いイメージだけが一人歩きし、実態はよく知られていない。「ひがしね百物語」としては、怪談が生まれた背景や地区の歴史から探らねばなるまいよ、と思った次第。

まずは土地の概要について。東根市は果樹栽培が盛んな平野が多いが、関山峠がある高崎地区は、奥羽山脈に面する山間部で地区の七割が山林。かつては煙草の栽培の他、林業が主産業で、木炭を作る炭焼きも盛んだった。

黒木 石油に取って代わられるまで、木炭は最も身近な、生活を支えるエネルギー源だった。山を持つていれば安定した高い収益が得られると、高崎村への嫁入り志望も多かったという。

その関山峠に新道を作り、トンネルを通す計画が持ち上がったのは明治時代。現在、東根市と仙台市とを結ぶ国道48号線と関山トンネルは昭和四十三年に作られたもの。明治時代に開通した古いトンネルについては、区別するために以下、関山隧道(すいどう)と呼称する。

黒木 この隧道を開いたのは、かの有名な山形の初代県令(県知事・三島通庸(みしまみちつね) ※注1)。明治新政府の元廃藩置県が進んでいたが、交通網は未整備だった。三島は第一に交通インフラに着手。山形県と隣県とを結ぶ新道の開発を県内各地で推し進めた。その一つが、この関山峠だった。

関山峠は、古く鎌倉時代には道が開かれていたというが、標高の高い嶺渡りの険路だった。冬は雪のため仙台まで歩いて五日かかるとも。折しも、宮城県湾に新しい港を建造し、横浜

港と連動させる計画が始動。山形―宮城間に荷馬車の通れる道が出来れば、山形内陸部と首都東京との新たな物資輸送ルートが生まれることになる。

黒木 すると、高崎村村長・村山和十郎が関山新道開発へ協力の手を挙げる。北村山地方一帯の経済発展が見込めると考えたのだろう。三島と和十郎が親しかったこともある。ただ、古道より標高の下がった所とはいえ、新道の開削は困難を極める。なにしる岩盤を掘り、隧道を通すというのだから。

和十郎ら、山形県民の熱意により、内務卿・伊藤博文の現地視察を経て、遂に正式に認可される。国費以外にも地元から負担金が徴収されるなど、強権的な工事に反対運動が起きつつも、高崎村民ほか、多くの関山の人々が工事に従事する事になった。そんな中、大きな事故が起きてしまう。

「黒煙もうもっ中、肉は飛び、血は流れ、木葉微塵となれるもの真黒となつて見分けのつかぬものなど、瞬時にして多数の負傷者」と、二十三名の爆死者を出した。累々たる屍と、氣息えんえんたるうめき声、狂気となって右往左往する同僚の叫び声、共に合して一大修羅場と化し、実に凄惨なる光景は言語に絶し、鬼気胸に迫つて身の毛もよだつ有様であった。しかして、この悲惨なる最期をとげた者は、皆かけがえのない一家の柱石たる壮年男女のみであった。あるいは世継ぎを失つて呆然自失せんばかりの老夫婦。あるいは乳呑児を持つ妻を失えるもの、数多くの子女を持つて夫を失えるものなど、各家庭の悲惨事は、真に同情に絶えない者ばかりであった。(原文ママ)

『高崎の歴史』(高崎の歴史刊行委員会 一九八九年)

黒木 明治十三年七月二十一日の「関山新道開削殉難事故」。事故現場は宮城側、作並から山形

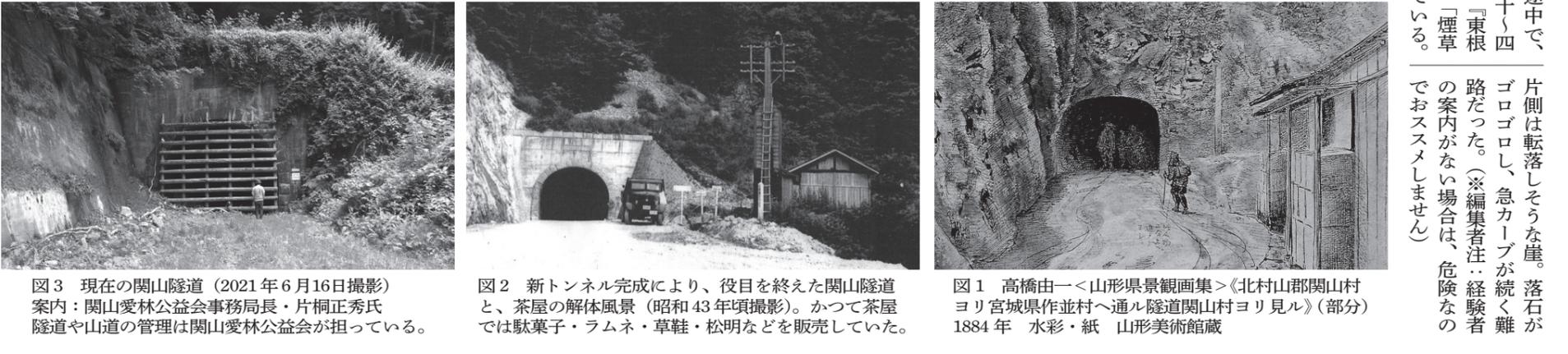


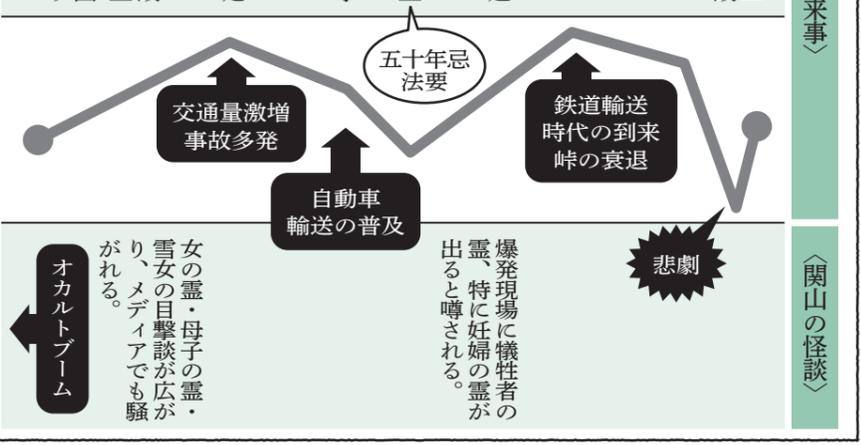
図3 現在の関山隧道 (2021年6月16日撮影) 案内：関山愛林公益会事務局長・片桐正秀氏 隧道や山道の管理は関山愛林公益会が担っている。

図2 新トンネル完成により、役目を終えた関山隧道と、茶屋の解体風景 (昭和43年頃撮影)。かつて茶屋では駄菓子・ラムネ・草鞋・松明などを販売していた。

図1 高橋由一<山形県景観画集>《北村山郡関山村ヨリ宮城県作並村へ通る隧道関山村ヨリ見ル》(部分) 1884年 水彩・紙 山形美術館蔵

【関山隧道・時系列】

昭和				大正		明治	
43	42	28	20	16	12	4	14
二名が亡くなった事故の交通安全慰霊碑建立 新関山トンネル・新国道48号線開通により役目を終える				太平洋戦争終戦 関山新道が国道に指定		爆発現場に殉難碑建立 太平洋戦争開戦	
				交通量激増 事故多発		奥羽本線全面開通	
				自動車輸送の普及		大滝不動尊に殉難碑建立(現「泉や」敷地内)	
				鉄道輸送時代の到来 峠の衰退		関山新道・隧道開削工事開始、七月爆発事故	
				悲劇		関山新道・隧道完成	
				五十周年忌法要		昭和十二年に大規模な改修工事が行われ、車の往来が盛んになる。敗戦時には、陸軍が隧道内に隠した物資を接収するために米軍	



現在の隧道の様子はこちら(図3)。封鎖された入口には、経済産業省認定「近代化産業遺産」のプレートが。覗くと、宮城側の出口が見えるほど短い。周辺には、木材を下に降ろすために使用した林業用ワイヤーが残されているだけで、栄えた頃の痕跡は見あたらなかった。

黒木 隧道完成で大いに栄えた関山峠だったが、その期間は長くはなかった。二十三年後の明治三十八年、奥羽本線が全面開通。鉄道で直接東京と行き来が可能となり、関山峠の利用者は激減。茶屋・旅館・荷方などは次々廃業し、衰退の一途を辿る。

その後、関山峠は時代に翻弄される(表1)。昭和初期に自動車車が全国に普及。輸送が車やトラックに代わり、一時廃れた関山峠が、再び脚光を浴びる。しかし、隧道は手掘りの小さなもの。大型車が通れないため、昭和十二年に大規模な改修工事が行われ、車の往来が盛んになる。敗戦時には、陸軍が隧道内に隠した物資を接収するために米軍

がやって来た。からかって銃で脅すなど乱暴だったため、一軒だけ残っていた茶屋も店を閉め、家族で山を下りたのだという。その後、国道に指定されるも道幅は狭いまま。急勾配や急カーブも多く、特に隧道を宮城側に抜けてすぐの急カーブでは転落事故が多発し問題視され、解消のために昭和四十三年に現在の新国道48号線と新関山トンネルが新たに開通。隧道はその役目を終えた。

黒木 今回のイベントチラシに使用された写真(図2)は、昭和四十三年頃に撮られた茶屋の解体風景だとか。

「見えにくいのが、電柱に登っている人が、この茶屋の主人の清野義五郎(せいごろう)氏。先ほどの米軍の話も語ったのもこの方。今日は、義五郎氏のご家族が会場にいらっしゃるとのこと。ぜひお話を伺いたい。」

清野 私が義五郎の息子にあたる。家族はあの茶屋に昭和三年〜二十年まで住んでいて、姉もそこで生まれたが、私は下の集

落に移ってから生まれたので、居住経験は無い。父は通信省関係の職員で、NTTの前身の電電公社の時代、山形・仙台間を結ぶ電話幹線の管理者だった。茶屋は通信局の事務所も兼ねていたと聞いている。

「当時の暮らしについて聞いたことは？」

清野 沢の水を引いて鱒を飼っていたとか、進駐軍が来た話は聞いた。折々に私も連れていってもらった。親にとっても、思い出深い場所だったのだろう。

「東根ふるさとものがたり第二集」(鈴木寛著 一九八〇年)には義五郎氏への貴重なインタビューが記載されている。電話もラジオも揃い、山菜や茸も採れる。茶屋も繁昌し忙しい時は女中を雇うほど。旅人との交流もあり、非常に楽しく過ごしたという。

黒木 ご家族からここで怖い体験をした話を聞いたことは？」

清野 バスが崖から落ちるなど事故が多かったと聞いたが、幽霊話などはなかった。

黒木 なるほど。当時怖い話は「流石」ではなく「たなら、いつ頃か」から発生して来たのかもしれない。大変重要な証言。ありがとうございます。

「いよいよ、本題の怪談の話に入る。関山峠では、色々なバターの怪談が語られていたのだが、特に多いのは、「女の霊」と「母子の霊」だ。ここに焦点を合わせて時系列を追って見ると、先ほどの隧道の歴史にもリンクした面白い変化がある事が分かった。

黒木 一番古い

「母子の霊」の記録は大正十四年頃。隧道工事の爆発事故からかなりの年月が経っているにもかかわらず、犠牲者達の霊が出るという噂が立った。特に、妊婦の犠牲者が胎児を抱えてさまよっている。凄惨な犠牲を払って完成した隧道がわずかの期間で廃れ、峠が衰退していった時期の事。その無念を恨んで出てくるのだという。これは見方を変えると、地元の人々の無念でもある。「生きていく側が何を見たか」を知ることに怪談のキモがある。と僕は思っている。峠が栄えたのは一瞬だった。そのやり切れなさ、彼らを忘れてはならないという想いから、この怪談は発生したのではないだろうか。

「この幽霊騒動を受けて、大正十四年に関山の大滝不動尊へ、昭和四年には事故現場へ、それぞれ殉難碑が建立され、遺族や有志が犠牲者を慰霊したという。その後、昭和三十年代から始まる交通戦争(※注2)の時代、関山峠は交通量の激増で、事故が多発。多くの犠牲者を出した。この頃から、「女の霊」や「母子の霊」の、新たな目撃談が新聞や雑誌を賑わすようになる。

黒木 戦後の動乱を経て、爆発事故の記憶が薄れかけていた頃に登場した幽霊話。バターはほぼ一緒。真夜中、女を車に乗せてあげるも、最後は姿が消えてシートが濡れていた。古くは「駕籠かき幽霊」とか人力車の怪談だったものが、この時期から車やタクシーにとって代わり、全国各地で一つの雛型となって語られるようになる。関山峠の場合は、「母子の霊」というのが重要なポイント。

「母子が犠牲になった交通事故の噂もあるが、事実かどうかは確認できなかった。

黒木 ところで皆さん、雪女を見た事は？あ、笑いましたね。そう、「雪女なんている筈ない」と皆さん思っているらしい。雪女の目撃談は近年ではすっかり聞かれなくなりましたが、昭和四十年代初めに、「関山峠に雪女が

出てきたのだから。」という新聞記事が掲載された事がある。昭和四十七年にも、猛吹雪の晩に作並温泉付近で車に乗せた女が、人家のない所で降りて雪の中に消えていったという、「雪女」の目撃談がある。深夜一人佇む怪しげな女。同じような存在なのに、現代人は、幽霊はともかく雪女なんて、と一笑に付してしまう。雪が深刻な脅威だった時代には各地に多くの雪女が存在していたのに、我々は近代化の過程で、彼女達と共存する心を失ってしまった。

実は雪女には、「子連れである」という伝承が多い。小正月の晩に多くの子連れで現れる話や、抱いている赤子を出会った人に預かってくれと頼む話などがある。この赤子を預けるエピソードは、「産女(うぶめ)」という妖怪の伝承と酷似している。

「最上郡では、雪女とは産女のことだ」という。産女はお産で亡くなった女性の霊が妖怪化したもので、こちらの伝承も県内各地に多い。

黒木 充実した医療設備が無い時代、出産で亡くなる母子は今よりずっと多かった。疫病や貧困で命を落とす子ども達。かつては、「母子」といえば悲しみが想起された。しかし、医療の充実とともに死産も減少し、ベビーブームの時代には子どもの数が急増。CMなどのメディアを通して、寄り添って笑う「幸せな母子像」のイメージが人々に浸透する。すると、関山峠の女の霊は、少し成長した五・六歳の子どもの連れ出てくるようになる。

「爆発事故で亡くなった胎児を宿した女性。関山峠に出たという雪女。違う話のように聞いて、実は同じ存在なのか。」

黒木 爆発事故の妊婦の犠牲者、お産で亡くなった霊、産女になり、雪女になったのではなにか。子と引き裂かれた雪女は一人の「女」となって彷徨う。悲しい母子の記憶が土地に染み込み、関山峠が変遷していくと共に、母子の記憶もまた様々に姿を変え、怪談として語り継がれてきたのだから。

「本来の事故の記憶、顔や名前のある個人が消失し、関山峠で亡くなった母親、という情報だけが残る。新トンネルが完成し、場所そのものが変わったにもかかわらず、世のオカルトブームに乗って、タクシー怪談などの様々な属性が追加で付与されていった結果、分かれやすく消費のしやすい「関山の怪談」が形成されたのでは。」

黒木 峠の変遷に次ぐ変遷に合わせ、「あるべき」とされる雛型に適応する形で、幽霊が生き残っていた。幽霊なのに生き残るなんて変な話だけれど。

「関山に怪異はあるのか。お化けなんかない」と主張したいわけではない。実際黒木氏が採集した体験談もある。

黒木 五十年、いや、一四〇年以上も語り継がれてきたには必ず理由がある筈。語られる磁

場、歴史を持った場所であるといえよう。苦難を乗り越えて作られた道が心霊スポットとしてしか語られないのはひどく勿体ない。当時の人々の暮らしが確かにそこにあり、歴史があった。怖い、怪しい。そこから掘り下げていくと見えてくるもの。「ひがしね百物語」というローカルだからこそ見つけた一つの形だと思おう。

※注1 三島通庸 薩摩藩出身。各地の県令を歴任後、明治九年、山形の初代県令(県知事)に就任。強権的に土木工事を進める手法から「鬼県令」と呼ばれる。洋画家・高橋由一に、開発した場所の風景画制作を多数依頼。

※注2 交通戦争 昭和三十年代以降、日本の交通事故死者数の水準が日清戦争での日本側戦死者数を上回る勢いで増加、まさに「戦争状態」であるとされた。

「怪談売買録 嗤い猿」 黒木あるじ著 竹書房怪談文庫 二〇一九年 B F クロ

怪談売買所を中心に、山形県内で収集された実録怪談集。過去の「ひがしね百物語」で参加者から披露された「おむかえ」「うしのおもいで」などを含む七十二話を収録。当館貸出可能。

「関山峠」出典

「嗤い猿」

「御所山信仰」

尾花沢市など各地から御所山に向けて登山道が開かれていたのが分かる。この地での山岳信仰の始まりは平安期頃という説もある。信仰の広がりと共に道も開かれたのか。

「御所山信仰の成立には、出羽三山信仰の影響があるという。黒木 山形県中部から庄内地方に連なる、羽黒山・月山・湯殿山の総称で、日本有数の山岳修験の場だ。現在も全国から多

かつて修験の場・霊山として信仰を集めた御所山。山や峠に残る不思議な話を紹介した。

「御所山」という字に変わったのだという。尾花沢市には、御所神社が数多く存在し、お墓とされる「天子塚」もある(※注3)。

「開祖とされる二人の人生には共通点が多い。」

黒木 順徳上皇が御所山で何かを成したという事ではないようだ。『御所山探訪七十年』(二〇一八年)などの著者・滝口国也氏は、出羽三山で修行を積んだ修験者が自己の道場として御所山を開き、発展させたのだと推察している。彼らは新たな信仰地を開拓する使命を持っていた

く修験者を集めている。この出羽三山の修験体系をモデルに御所山信仰の形が出来たのではないかと推測されている。

「御所山と出羽三山の類似点を比較していきたい(次ページ・表2)。」

黒木 どちらの山も、開山の縁起に皇族が関わっている。御所山は元々、「五所山」だった。一帯に連なる五つの山を駆け巡る修行、「回峰行」からきた名称。しかし、順徳上皇の伝説から、いつしか天子のお住まいを表す「御所山」という字に変わったのだという。尾花沢市には、御所神社が数多く存在し、お墓とされる「天子塚」もある(※注3)。

「開祖とされる二人の人生には共通点が多い。」

黒木 順徳上皇が御所山で何かを成したという事ではないようだ。『御所山探訪七十年』(二〇一八年)などの著者・滝口国也氏は、出羽三山で修行を積んだ修験者が自己の道場として御所山を開き、発展させたのだと推察している。彼らは新たな信仰地を開拓する使命を持っていた

御所山		出羽三山	
じゅんとくてんのう 順徳天皇(上皇)	開祖	はちこのおうじ 蜂子皇子	
後鳥羽上皇の第三皇子。鎌倉幕府得宗・北条義時に対し、父と共に「承久の乱」を起こすも討幕は失敗、佐渡島に流されて生涯を閉じた。伝説では、密かに佐渡島を脱出し現在の酒田市に上陸、最上川をさかのぼって御所山に隠棲し、最期は現在の尾花沢市で崩御したという。		飛鳥時代、崇峻天皇の第三皇子として生まれたが、父が蘇我馬子に暗殺されたため、都を逃れて丹後の由良から船で現在の鶴岡市由良に辿り着き、三本足の鳥に導かれ出羽三山を開く。出羽三山神社内に蜂子皇子墓がある。宮内庁が管理する、東北地方唯一の皇族の墓。	
五山を巡る回峰行 通称「東の御山」		参拝 ルート	三山を巡る回峰行 通称「西の御山」

とも。その「箔付け」のためには、蜂子皇子とよく似た運命を辿った順徳上皇の物語は、開山の縁起にはうってつけではなかったか。順徳上皇を慕って多くの信仰者が訪れ、山は栄えたという。――悲劇の貴人が流れ着いた山。事実かどうかはともかく、確かにロマンがあり、特別な土地に感じられる。

黒木 蜂子皇子は、多くの人々の苦悩を取り除いた事から、能除大師(のうじよたいし)などと呼ばれた。残された肖像画は異形の姿をしている。疱瘡の痕だとか、人々の悩みを聞き続けた結果だとか、魔除けの力を表しているとも。異形の者は人知を超えた力を持つという分かりやすいシンボルである。

――御所山周辺には、最盛期、「日向三十三坊、日陰三十三坊」と云い伝えられるほど宿坊があったという。今も市内中央部を流れる白水川は、昔、宿坊の修行者が洗う米の汁で川が真っ白になった事が名前の由来だとか。山は大いに栄えるが、両眺坊・両覚坊という悪僧が現れる。成仏を願う善男善女を銅製の大きな蓮華台に乗せ、大勢の信者達が周りでお題目を唱えれば、楽に極楽往生出来るとして金品を取っていた。しかし実際は、蓮華台の下から槍で突き殺すという残酷なもので、誑経や鐘の音



各地で天台宗の寺を禅宗に改宗させていたともいい、山形市の山寺(立石寺)も、時頼が訪れて改宗したと伝わっている。

黒木 閉山の伝説には、時頼の宗教政策が反映されているのかもしれない。

――御所山信仰は文献も少なく、分らない事も多い。ただ、信仰が失われることは無かった。昭和中期頃まで、この地方一帯では、男子が誕生すれば山の神に参拝、健全な成長を祈願し、「西の御山」出羽三山詣を誓った。そして十五歳になれば出羽三山に御礼参りに行かせ、二、三年後には納め参りと称し、「東の御山」御所山参りをする一連の流れが風習化されていたという。

元々あった出羽三山詣に後付けされたものと考えられている。当時、地区長が子ども達の御礼参りの旅路に障りがないよう、地域住民にその期間の精進潔斎を呼びかけた記録が残っている。父親は水垢離をして無事を祈ったという。

黒木 大人になるための通過儀礼だったのだろう。今日の参加者のご家族にも経験された方がいたかもしれない。しかし戦後、すっかりこの風習は遠のいてしまった。

――御所山信仰そのものは現在ほとんど無くなり、「神秘の山」としての姿は薄れているのかもしれない。しかし、この山を愛し、守る活動をされている団体や個人は少なくない。

黒木 元々山は神域だった。昔ほどの信仰心は薄れたとはいえず、山が人知の及ばぬ力を持つ場所である事に変わりはない。近所の何気ない裏山や、出勤途中に遠目に見ていたあの山にも、探ってみれば忘れられた信仰や伝説が眠っている。そして「怪しい」話も。昭和三十三年、御所山の山小屋に二メートルの大男が現れて登山者の夕食や

その悲鳴をかき消していた。黒木 「蓮華往生」と呼ばれる悪事で、江戸時代、関東のある寺で実際に起きたという、残酷非道な事件(※場所は諸説あり)。それ以前の時代の御所山に同じ話があるのは興味深い。

――悪事の噂は鎌倉幕府に届き、第五代執権・北条時頼の命で寺院は焼き払われ、御所山は閉山させられてしまった、という話が土地の古老によって伝えられている。北条時頼は、「回國伝説」のある人物。弱者の救済政策で人気があり、やがて諸国を回って民衆のために勧善懲悪を行っているという伝説が生まれた。別の説では、時頼みずから御所山を偵察し、多くの信者が集う様子に、承久の乱のような蜂起を恐れて山を封じたとか。また、禅宗の布教に熱心だった時頼は、



――山形県北部、A温泉の社長から聞いた話。数年前、一人で湯治に来ていたお婆さんが大浴場で亡くなってしまった。遺族が引き取りに来るまで遺された衣類や荷物を預かる事になり、大浴場の隣の物置に一時保管していた。無事に引き渡すからしばらくすると、板長が変な事を言い出した。物置の隣には、夜勤スタッフ用の仮眠室があるのだが、そこで寝ていると物置から誰かがノックしてくるのだ。何かの間違いだらうと、その場限りの話で終わらせてしまったのだが、新しく入って来た別のスタッフも同じ事を言い出した。夜中に物置から「ねえ、ねえー」と老婆の声がすると、このスタッ

フは例の湯治客の死は知らない。ゾクツとした。が、説明できず誤魔化してしまった。

運転手からも相談があった。A温泉は山奥にあるため、遠く離れた最寄り駅まで宿泊客をマイクロバスで送迎している。その運転手は、道中のトンネルの中で、何度も下着姿の老婆を見たという。やがて運転手は辞めてしま。代わりの人も見つからず、社長自ら送迎をする事になる。ある日、件のトンネルに差し掛かると、旅館の浴衣を着た老婆がいた。歩幅とスピードが合っていないようなちびくろな動きで、気が悪い。急に、自分を追っているのでは?と怖くなり、バスのスピードを上げて逃げ帰ったという。社長曰く、「トンネルが通っている山は、昔から山岳信仰の強い霊山。あのお婆さんは、山の力が強くて家に帰れないのかもしれない」。

こないだ気になってラインをしてみたら、一言「まだ出る」と返ってきた。

※注3 順徳上皇の兄・土御門上皇は、「承久の乱」には未関与だったが、自ら望んで阿波国(現徳島県)に配流となった。終焉とされる地には御所神社があり、御祭神として祀られている。

第三部

# ふしぎポストの投稿の紹介 怪異譚蒐集集の時間

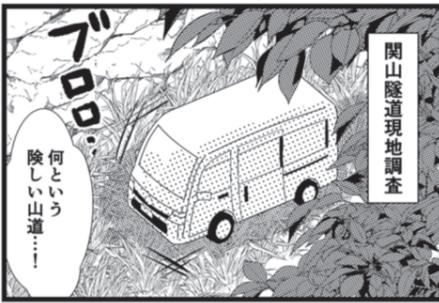
寄せられた投稿の一部をご紹介します。  
ナンバー「タイトル」名前/年齢/性別  
寄せられた投稿は、掲載に際して編集しております。



1. 「トイレの助け舟」皆川萌 65/女/義父が、近所からの帰り道で一時も迷ってしまった。気が付くと持っていたご馳走が無くなっていった。別の人は堰の中で「いい湯だ」と浸かっていたところを引き上げられ、正気に戻ると寒がって喚いたという。やはりご馳走は消えていたそう。
2. 「閑山あれこれ1」はつば ふみふみ/60/女/①五十年前山形に山形に本社のある貨物屋さんから聞いた話。閑山の「泉や」付近から白いワンピースの女性を乗せ、仙台まで送っていったという。閑山の怪談を聞く度に、噂の発信源はあの貨物屋さんではなかったかと思う。
3. 「狐の仕業」星川直子/
4. 「侍滅の刃」ララちゃんママ/63/女/実家は茅葺き屋根だった。寝ようとする時、武者のようなお侍が出て毎日泣いた。長老に両親が相談した所、枕の下に包丁をさらしにまいて寝てみたらといわれ、その通りにした。
5. 「瞬きの魔女」とつりんな/10/女/寝ていたら目の前に魔女がいて、瞬きしたら消えた。次の日は棚の上にいた。洗濯物と見間違ったかと思っただけ「そんなところには置かないよ」と母に言われた。
6. 「呼びかけ」ササハラカナコ/23/女/小学生の時、家で宿題中に誰かが隣に座った気がして、母だと思っていた。ふと母を呼ぼうとした私の口から「おじいちゃん」という思いもかけない言葉が出た。祖父は生まれる前に亡くなっていて、隣には祖父は勿論、母もおらず、困惑した。
7. 「おしらせ」いのあゆ/38/女/友人Aの話。在宅時、洗面所に知らない子どもがいるのを見た。驚いたが不思議と恐怖は感じなかった。その後すぐに妊娠が判明した。Aの話の面白がって聞いていた友人B。深夜、突然インターホンが鳴って飛び起きた。こんな夜中に怖い、と居留守を使った。後日、妊娠が判明。Aの話の面白がって聞いていた友人B。深夜、突然インターホンが鳴って飛び起きた。こんな夜中に怖い、と居留守を使った。後日、妊娠が判明。
8. 「あらざる人々」野澤紗季/11/女/①小2の時の話。弟のトイレに付き添っていたら、父の部屋に白い服を着た髪長い女の人がいるのを見た。とても怖くて私もトイレに滑り込んだ。
9. 「にぎやかな家」奥山杏菜/10/女/祖母から聞いた話。家で幽霊がじつとこっちは見えていたという。後日、知り合いに視てもらおうと生霊がたくさんついていてと言われ、除霊してもらったそう。

# まなびあサン vol.5

by 金田けいも



※「しほ」も出ず「無事帰りました。」

10 「関山あれこれ2」斎藤恋海/10/女▼関山に雨が降ると、二人の女の子がこつちを見て笑っているという。それを見ると怖いことが起きるそうだ。

11 「山のけんか」武田煌成/10/男▼水晶山と黒伏山は昔綱引きをした。水晶山が勝って、負けた黒伏山は形が斜めになってしまった。

12 「そばにいる」高橋歩夢/11/男▼飼いの犬が死んでしまった。数か月後、父がその犬を見た。名を呼んだら消えてしまったそうだ。

13 「関山あれこれ3」くろあまき/55/女▼関山には「仲直山」という山があり、仲直観音様の祠もある。「昔より清きうてなましまして人のおなかを直す御菩薩」という御詠歌もあり、部落の女性達に大事に祀られている。そのおかげか、部落では大きな諍いも無く、離婚する夫婦もいないが、部落を出た人の中には離婚した人もいるとか。

14 「旧知の人」結城淳/52/男▼街中で男性から突然名前を呼ばれた。久しぶりと言われても誰か分からずにいると、父の名前や、昔は指相撲で遊んでやっとな、などと懐かしそうに語る。結局誰か分からないまま別れた。後で、もしかして亡くなった祖父だったのでは?と思った。面影も無くその場で気づけなかったのが悔やまれる。

## 怪異譚蒐集の時間

〈参加者による怪談披露〉

1. 女性/関山にある某飲食店の娘から聞いた話。席に着いた客数に対して、店側で用意するお冷の数が一つ多い時がある。大体そういう時は、髪の毛の長い女性を客の中に見たという。
2. 男性/夕方、仙台からの帰り道、関山トンネルを抜け信号で停車していたら、反対車線側の坂道を、子どもを自転車の荷台に乗せた若い母親が駆け登っていた。子どもを乗せているのにとどめて速く、時間も時間だし、何よりこの先には人家はない。異様な感じがして忘れられない、と家族から聞いた。
3. 女性/自衛官の夫から聞いた話。S県A市で寮生活をしてた時の事。寮には「出る」という噂があった。ある夜、目が覚めると、部屋の天井にある細い窓幅いっばいに、横向きで大きな顔がよきよきとぞいて驚いた。しかしすぐに冷静になり、そのままぐっすり寝たという。
4. 男性/中学一年の時に祖母が亡くなった。神式の葬儀や直会を終えて帰宅し、皆が集まる居間を出て、一人、神棚の間を横切ると、供物でいっぱい神棚に向かっじつと正座する祖母がいた。祖母は白装束を着ていた。びくくりしてその場から逃げたが、戻って見ると誰も居なかった。怖いというより驚いた。

# 怪のスポットを訪ねて



### 東根市猪野沢地区 小山田(猪野沢)新道

三 島通庸と村山和十郎により切り開かれた関山街道と関山街道。実はそれに先んじて開かれた街道が一つ存在した。高崎村の南隣、猪野沢村から宮城県名取郡新川村まで続く小山田(猪野沢)新道である。開いたのは、猪野沢村の名主・小山田

田理兵衛。理兵衛はいわゆる篤志家で、寺の建立や中学塾の開校など、村づくりに尽力した。新道の開発は県より命じられたものだが、小山田家の莫大な私財が投入されたという。明治五年に着工し、十年に完成。しかし、県令に就いた三島は関山峠の利

便性を強調、国費を取り付けて関山街道の開削に成功。血の滲むような努力の果てに開かれた小山田新道は、完成後間もなく廃道になってしまった。かたや行列が出来るほどの関山街道の賑わいを、理兵衛はどんな想いで眺めたのだろうか。

今回、猪野沢地区を運行するスクールバスの添乗員をされている大江義晴氏から、小山田新道や関山に関する多くの資料や氏の随筆をご提供いただいた。現代における地区の人々の営みに対する、氏の深い愛情が伝わってくるものばかりだった。

当館には、長年にわたり北村山地方の演劇界と文学界を主導した、故大江権八氏の戯曲集「峠の小春」が収められている。表題作は関山街道開発に携わった人々を描いており、作中、開発に苦勞を重ねる和十郎に、理兵衛から「励まし状」が届く場面がある。理兵衛役を演じた義晴氏によると、実際にはなかった事だが、作者の心情で理兵衛を立てたのだという。悔しさをやみ切れなさを飲み込み、一帯の繁栄を願う気持ちは同じだという理兵衛の心中を表現したのか。村に尽くした理兵衛の志を後世に伝える事こそが、我々に課された宿題だと義晴氏は語っている。

後に小山田家は北海道に移住、東根市には膨大な「小山田家文書」が寄贈された。解説が進めば当時の状況がもっと明らかになるかもしれない。そして、今では敷に覆われ、自然に還ろうとしている小山田新道も、残雪の季節になるとかすかにその姿を山肌に現す事があるという。かつての地区の暮らしの息遣いを、今ならまだ迎える事が出来る。高崎村のカリスマ的村長・和十郎のその後についても記しておきたい。明治三十二年、十三戸の村人達を引き連れ、六十歳で北海道のシントク原野に移住。新天地開拓に人生の最期を捧げた。奥羽本線の開通計画を知り、峠の衰退を予測しての事だったという。現在、新得町と東根市との間には姉妹都市提携が結ばれている。(天野)

## スタッフ裏方ばなし



えてくださったが、「怖い」体験はなかったという。関山峠の怪談についてもお二人ともあまり知らないとの事で、少々意外に思った。

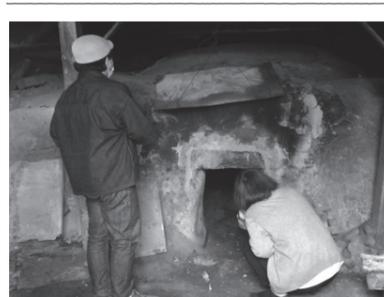
そもそも「関山愛林公益会」の設立の元になったのは、村山和十郎が行った、「山林払い下げ運動」であるという。関山の山林は、江戸時代までは村全体で管理・利用していたのだが、明

共同体の運営がなされている地域だと感じた。最初は山の怪しい話があるのではと思っていったが、想像していたのとは違う、山の暮らしの一端が垣間見えて、とても興味深い取材となった。

戦後、燃料は薪・木炭から石油やガスに転換、新関山トンネルの開通工事へ従事したのをきっかけに新炭業や林業から離れる人が増え、現在は専業の人はほぼいないという。

高崎小学校の児童達の発案で造られた、「キッズドリームランド里山館」にもお邪魔して、炭焼き窯を見せられた。二〇〇三年に、児童達自ら「関山炭」の文化を残す活動をスタートさせたのだという。関山愛林公益会の本格的な指導の元、児童達

が総合学習の時間で作った関山炭は、毎年お祭りで完売するほど人気だとか。「自分達で何でもやる」という、先祖の気概が受け継がれている頼もしい地域でもあるようだ。(天野)



炭焼き窯はかなり大きく本格的なものだった。

## 編集後記

大きな自然災害により、隣県や首都圏との交通網が分断されてしまう事があります。私たちの生活は道が無くては成り立ちません。それが繋がっているのは当たり前前の事ではなく、先人達の犠牲や、日々の管理を担う方々のおかげのだと、今強く実感しています。東根市民にとって欠かせない重要道路、関山街道の歴史を知る事はとても意義深く、まさに「怪談から地域を読み解く」会になったのではないのでしょうか。また、関山峠や御所山に心惹かれ、個人で熱心に調査をしている方々が多いのも驚きでした。最後に、取材にご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。



第5号 2022年3月31日発行  
発行：東根市公益文化施設まなびあテラス 〒999-3730  
山形県東根市中央南1丁目7-3  
TEL: 0237-53-0223 (代表)  
FAX: 0237-42-1296  
HP: http://www.manabiterrace.jp  
E-mail: info@manabiterrace.jp  
編集/DTP: まなびあテラス市民活動支援センタースタッフ(天野・高橋)  
執筆協力: 黒木あるじ

## ② 関山峠や御所山の話

関山峠や御所山にまつわる体験談や、噂話、思い出などをご存知の方の投稿をお待ちしています。関山地区の暮らしの事でもかまいません。電子メール、または直接まなびあテラス総合力ウンターまでお寄せください。いずれ来とまった形で発表する予定です。乞うご期待!



第五夜でプレゼントした缶バッジのデザイン

## 投稿 大募集



① ふしぎポストへの怪談投稿

「黒木あるじとひがしね百物語」では、皆様が体験した怪談を随時募集しています。ご自身で体験した不思議な話や、ご家族お友達との体験談などをお寄せ下さい。百物語当日に黒木氏により発表された方には、黒木あるじ特製除霊札とひがしね百物語オリジナル缶バッジを差し上げます(当日参加された方のみ)。ふしぎポストが設置されていない期間は、電子メール等で受付しています。